

# 地域資源活用シンポジウムin市原 活動報告

2018年6月17日、市原市五井会館にてシンポジウムが開催されました。国産メンマをテーマに、九州糸島メンマで活躍されている日高栄治さんの講演、そして千葉県内でも始まった国産メンマ創りについて知ってもらうために、林野庁、NPO法人、企業関係者と多くの方が会場に足を運んでくださりました。以下、報告いたします。

高澤真 | ちば里山・バイオマス協議会 代表幹事 / 農林水産省認定バイオマスタウンアドバイザー



## 国産メンマ創りをきっかけに、竹林整備と地域資源活用の推進を

千葉県でも国産メンマ創りが始まりました。多くの人に地域資源活用に関心を持っていただきたくてシンポジウムを開催しました。市原市では竹の破砕機を貸し出し、活動を応援しています。竹チップや竹パウダー・竹炭などが有用に活用されるようになりました。参加者には、先行して国産メンマの製造と販売体制を築いた、九州糸島の日高栄治さんの講演を聞いていただき、実際に国産メンマを試食してみて、竹林の持つ地域資源の可能性を理解していただければと思います。中房総地域には素晴らしい自然環境があります。本シンポジウムが一つのきっかけとなり、国産メンマを通して地域の資源活用に希望を見出していただき、竹林整備やエコツーリズムなどの市民活動が活発に進むことを願っています。

## 来賓挨拶



小出譲治  
市原市長

2年前にも、ちば里山バイオマス協議会のシンポジウムに参加しました。里山保全、利活用、バイオマスに尽力、環境行政にかかわっていただきますことに御礼。2015年12月設立以来、森、川、海を一体としてとらえた講演会を開催されるなど精力的に活動していることに、心から敬意を表します。市原市は、北部には国内有数のコンビナートがあり、南部には田園地域、山林が広がる丘陵地、渓谷など変化に富んだ美しい里山が広がる。この自然環境を貴重な地域資源ととらえ、成田、羽田、両空港から1時間の恵まれた立地をいかし、広域観光産業の取り組みを進める。世界で空港から一番近い里山として展開している。市が誇る自然環境を子や孫、次の世代に持続可能な社会としてつなぐため経済政策と環境保全を両立させることは、私たちの責務である。本日の主題でもある、荒れた竹林については、景観はもとより有害鳥獣の住処にもなっていて、多くの自治体がかかげる大きな課題になっている。このままでは負の遺産となる竹林から、安全で美味しい地域の特産品を作ろうとする国産メンマの取り組みは、環境保全とともに新たな事業創出にもつながる非常に意義深いものだと思う。大きな期待を寄せている。市原市としては、美しい里山を始めとする豊かな自然環境を未来に引き継ぐべきその魅力を活かし、自然と共存共生しながら発展する街づくりを進めていくので、皆様には引き続き、ご理解、ご協力を賜りたい。結びに、ちば里山・バイオマス協議会の益々の発展と、会場にお集まりの皆様のさらなるご活躍を祈念いたします。



伊豆倉雄太  
千葉県議会議員

皆様こんにちは、私の後援会長(松本会長)が、南市原里山連合で活動させていただき、私もそれをきっかけに地域の山林整備や草刈り等活動している。住まいは、高滝ダムのすぐそば、幼少期からチェーンソーや草刈り機の使い方を仕込まれた。私の友人が東京から来た時、都心から近いのに恵まれた環境で生活しているねと言った。しかし、お客様が見ていい環境だねと言ってくれるのは、ほったらかしにしているものでない。手を入れて適正な整備が必要です。今、千葉県は、環境・観光立国として行政を進めている。そして、里山整備といいますが行政の支援が少ないことは、私も肌で感じている。行政というのは限られた予算の中で優先順位を決めておこなうわけですが、荒廃した土地というのは有害鳥獣の住処になっている。実際に里山活動は手弁当で行われているのが現状です。県のほうでは、里山活動に企業の支援が可能ではないかと考える。国産メンマづくり、皆さん頭を悩ませている竹林整備というものがこうした企業も含めた取り組みで少しでも前進すれば、竹林が資源となりうることで、私も期待しているところです。皆さんの意見を頂戴しながら、活動しやすい環境づくりが議員の使命であると思っている。市原市の発展、皆様の活躍のため意見を寄せていただきたい。

## 講演 | 糸島コミュニティ事業研究会 主宰「純国産の美味しいメンマ創りで全国的課題の竹林整備を」

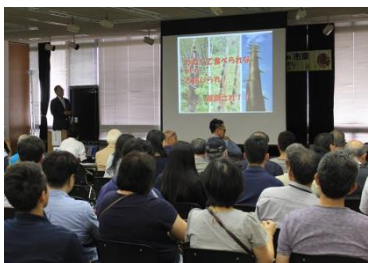
### 九州 糸島での取り組み



糸島には、竹林が360ha、侵入竹林は400haあり拡大している。千葉県も関東では多い。竹の利用が進めば、自然、竹林整備が進む。平成23年竹パウダーの用途開発から始まった。食用竹パウダーを作った。今年で5年目、ぬか床に竹パウダーを混ぜて使うことを進めている。5年前のアンケートの結果、昔は70%の家にぬか床があったが今は17%しかない。ぬか床は日本の文化、大切にしたい。乳酸発酵食品はいいところがたくさんある。竹パウダーを入れることで、水を吸う力が強いので通気性がよくなり、臭くならない、水抜きもいらぬ。糠と竹パウダーを2対1で使用している。さらに醤油かすを入れればもろみ味になる。竹林整備は環境問題とも関係していてメディアにも取り上げられている。竹パウダーは食用として3%から5%加えてクッキーなど作る。くせがなく、食物繊維、シリカの効用などサプリメントとしても期待されている。このように竹の価値を上げる努力をしてきた。土壌改良剤としては80円から200円くらい、乾燥させて食品用途になると2000円/kgになる。付加価値は高い。ただし用途の数量が少ない。そこでもっと大量に使う用途開発として国産メンマに行き着いた。

### これからは、タケノコや国産メンマのための竹林整備を

今までは竹林整備から食につながる事がなかった。そこに、タケノコや国産メンマのための竹林整備という考え方が生まれてきた。タケノコと竹林整備がつながったことで効率的な竹林整備が構築された。メンマの市場としては、99%が輸入品、原料は麻竹(まちく)、日本にはほとんどない。国産メンマづくりは、2mくらいの幼竹を収穫して、穂先、根本それぞれ全量使う。穂先は柔らかく、根本はおやきなどに使うと歯ごたえがあってよい。今までは蹴って倒していた。幼竹の収穫は、荒れた山でも可能である。2mのたけのこは12kgくらいある。たけのこの価格は年明けから4月上旬が高い、4月下旬からは、幼竹にして販売したほうが価値があるという新たな発想が起こってきた。1kg3000円から4000円で販売できる国産メンマには大きな可能性がある。



# 地域資源活用シンポジウムin市原 活動報告 NO2

## パネルディスカッション「千葉県での国産メンマ事業化と里山活動の取り組み」



(一社)もりびと  
理事 千葉美賀子

昨年糸島に出向き、今年試作品を作った、中房総里山活用協議会という任意団体を作り、市原市、いすみ、長柄町、長南町で取り組んでいる。6次産業化の取り組みとしてやっていきたい。問題は売り先。それをどうクリアしているのか九州の糸島を視察した。巨大な直売所をみて驚いた。それがあるからこそ取り組めるとつくづく思った。千葉に当てはめると難しい。そこで、千葉県産業振興センターと組んでやろうと思った。幼竹の収穫は里山団体が担当し、加工から販売は房の駅農場にお願いすることになった。農商工連携として、中小機構の指導も受けて、進めている。今日は試作品を用意することができました。



(企)情熱市原ワンハート  
専務理事 大矢仁

私たちワンハートは、市原市の自営業者、農業者などが集まり、地産地消食品を作ろうと、まずは梨ゼリー、梨ベースなど作った。メンバーの花見さん所有の竹林からメンマを作った。安心安全な加工品ができるように、設備を整えた。徹底的な衛生管理を行っている。食品微生物検査も実施している。PL保険、ハサップ認証も目指している。



(株)房の駅農場  
代表 岩本真哉

現在、やまかのなかまから業務委託を受けて、房の駅農場を運営している。そこに大きくなったタケノコを持ち込んでもらい、皮をむいて30cmほどにカットして受け入れた。事業としては、干し芋など製造しているがその蒸かし機に入れて、タケノコを熱処理し、それを10%の塩漬けにした。1か月ほどして塩を抜き、カットして、メンマの味付けは小川屋味噌店で行った。たまり醤油とごま油、赤唐辛子で、味付けをした。今年は400kgから500kgの国産メンマができる予定。ちなみにゾウの国とは協力関係にあり、ゾウはたけのこの皮を喜んで食べる。干し芋の残差も食べる。ゾウの排泄物はたい肥化して利用している。循環型農業を実践している。

### 里山維持のための包括的な支援を



今泉裕治  
林野庁  
森林利用課課長

5月に森林経営管理法が国会を通った。市長村が預かって管理をし、経営管理件の行使ができるようになった。ビジネスになりそうなところは林業経営をおこなう。さらに、こうした仕組みに森林環境税は使われる予定。詳しくは来年の国会で決まる予定。都道府県への説明を担当者がしている。ポイントは人工林が成熟しても用材にならない。ここを手入れをすることが主な目的。天然林、竹林の整備についても森林環境税が使える。現在東日本大震災復興に充てられている年間600億円が、2024年からはそっくり森林環境税になる予定。それに先立ち森林環境贈与税は来年から配布が始まる。総務省が借金をしてでも先に配り始めるという200億円から始まる。ぜひ活用してもらいたい。



### 4団体の国産メンマ食べ比べ



九州の糸島メンマのほか、中房総メンマ、情熱市原ワンハート製メンマ、木更津メンマの4団体の試食が提供され、参加者はメンマの食べ比べを楽しんだ。感想は、「とても美味しい」「今までのメンマの概念が変わる」「自宅でも作ってみたい」「これで竹林整備が進めばよいことですね」などと述べていた。今までラーメンのメンマは食べなかったという人も「これなら食べられます」という感想もあった。

# 地域資源活用シンポジウムin市原 報告 その3

曾根原宗夫 天竜川驚流峡復活プロジェクト 国産メンマプロジェクトリーダー



## 国産メンマ創りをきっかけに、竹林整備と地域資源活用の推進を

長野県飯田市で、天竜川船下りの船頭をしている。国産メンマ3年目、原料収穫から製品開発まで一貫して行っている。長野県知事にも試食してもらった。長野県の特産品にする話もある。南アルプスと中央アルプスの谷間の伊那谷と呼ばれている地域にちなんで、「伊那ちく」と名付けた。



群馬県議会議員  
金子渡

渋川、伊香保地域の木質バイオマスの利用に取り組んでいる。群馬県では、緑の森林税という環境森林税を導入している。今年度夜償は、8億7800万円、水源の環境保全、ボランティア活動も使われている。里山活動実績は88ha、1250haの竹林面積もある。福祉活動と結びつけることも支援している。



香川県三豊市  
喜田貴伸

うどん県の香川から来た。タケノコの産地。しかし兼業でないと成り立たない。国産メンマは救世主だと思った。予算がないところからどのように立ち上げたらよいか話を伺いたい。(もりびとの千葉氏より、中房総の立ち上げについて話をいただいた)



木更津市 篠田絵美

君津にマリポコミュという微生物の研究から発酵について詳しい皆さんと発行メンマを作っている。発酵大豆煮汁を使ってメンマを作った。3%くらいの塩、黒糖も入れて作ったメンマを試食してもらった。今後試食会を通して販売をしていく予定。木更津では、竹灯りに取り組んでいる。竹の可能性をこれからも見つけていきたい。



市原市役所環境部 石橋和隆

市原市は竹の利活用に取り組み、平成23年から破碎機の貸し出しをしている。現在好評をいただいで、年間半分くらい稼働している。竹を切ったら何かに使ってくださいということで、土壌改良剤に使用されることが多い。竹は用材、破碎、カスケード利用によって地域の資源になると思う。

## 会場からの質問



鶴舞桜が丘高校  
3年 岩瀬 駿

実家がたけのこ農家、将来引き継ぐため竹のあらゆることを勉強したい。特にタケノコとしては大きくなりすぎた幼竹をメンマに加工して食べることに興味をもって参加した。



今永信之  
九州出身

九州で、地域の取り組みとして国産メンマ創りに取り組みたい。収穫から製造、販売までどのような課題があるか？(回答: 収穫時には、収穫量と皮むき、ゆでる、塩漬けなどの段取りが大切。1年のうち限られた時期なので事前準備が必要)。

## 地域おこし協力隊の紹介



市原市地域おこし協力隊  
高橋洋介

養老溪谷で、菜の花から菜種油を絞って販売している。里山活動の人たちといろいろな活動してみたい。



大多喜町  
地域おこし協力隊  
伊藤緩奈

今年4月から、放置竹林の整備とその活用に取り組んでいる。ちば里山・バイオマス協議会の研修生としてもいろいろ取り組みたい。

## 閉会あいさつ



竹もりの里  
鹿嶋與一

主催：ちば里山